



## 巻頭言

# 遊びの充実を確かなものに

河 邊 貴 子

チナツ先生は私が園長を兼務する附属園に、この春、着任したばかりである。新任と言っても新人ではなく、公立幼稚園で十年の保育経験がある。それこそ新人の頃、園内研究会に参加した際に保育を見る機会があったが、記録の取り方、環境のつくり方が抜群に的確で、子どもたちがよく遊んでいたのを憶えている。

チナツ先生には前任の先生のクラスを引き継いで五歳児組を担当してもらうことにした。その理由は四歳児の遊びは充実しているのに、五歳後半の遊びが質的に高まっていないというのが本園の毎年の課題だからである。何が問題なのか。新しい風が吹き込んで、五歳児の遊びや生活がどう変わっていくか、そして先生のどのような動きが子どもの



遊びを高めるのかを見極めたかった。

幼児教育では遊びは重要な学習と位置づけられ、そこでの体験が小学校以降の学びの基礎を形成すると言われている。言い換えれば、年齢に応じた遊びの充実が豊かな学びのために欠かせないはずである。ところが、研究保育を伴う園内研究会に参加してみると、五歳児の中にはその遊びが面白いから没頭するというよりも、ただやり慣れた遊びを繰り返しているだけのように見える姿が多いことに気付く。五歳児後半の遊びが停滞する傾向にあるというのは本園ばかりの課題ではないように思う。

その原因は保育者の働きかけの不足にある。保育者は子どもの育ちに応じて環境を構成しなければならぬが、五歳児の満足を満たすには不十分なのではないか。先に子どもの育ちに応じた遊びの充実が必要と述べたが、五歳後半にもなると知的好奇心が高まって「面白い」と思ったこと（これを個の遊びの課題と呼ぼう）を追求しようとする持続力も付いてくる。その上、一人で遊ぶのではなく、その遊びの課題を友達と共有し、場やモノを自分達で準備して取り組もうという意欲が高まってくる。遊び課題の追求の面白さとそれを友達と協同して展開していく面白さの二つがうまく絡み合った時、子どもたちは遊びに集中し、主体的にモノにも人にも関わるのである。

しかしそう簡単ではない。そもそも強く動機付けられるような遊びに出合えなかったり、友達と考えや思いを合わせられなかったりする。三年間の保育年限を見通して豊富な



イメージを醸成したり、手応えのある環境に出会わせたりしてこなかった「つけ」が、五歳児後半に現れているのではないだろうか。

だからといって、遊びのテーマを保育者が次々になげかけるような方向に五歳児の保育カリキュラムを替えていこうとする動きには慎重になりたい。今でも、子どもは保育者が与えた課題に追われて動き、その隙間の時間をどう過ごしていいか分からないという保育の実態もある。「すること」を提案するのではなく、「したいこと」を子どもの中から引き出し、環境を通して高めていくような保育を追求したい。幼児教育が築き上げてきた「遊びを通した教育」を深化させるために大切なのは、子どもの主体性と保育者の計画性の接点の精度を高めていく努力なのである。

さて、四月、チナツ先生は初めて出会った子どもたちとの間に信頼関係を築くことに腐心した。スキンシップやふざけっことを通して一人一人の身体と心に触れる。それと共に大切にしていたのが、学級全体で楽しむ活動の選択である。楽しくて思わず互いに顔を見合わせてしまうようなダンスやゲームが次々に提案され、いつの間にか担任が替わった不安は払拭されていた。

それから、子どもたちの遊びが継続しない傾向にあることに気付き、遊びに必要な場やモノを主体的につくれるような環境を整備した。モノに向き合うことによって子どもの中のイメージが明確になり、遊びに流れが生まれるようになる。次第に遊びは持続的になり、友達同士のやりとりも増えてきた。登園前、先生は前日の遊びの実態を踏まえて環境を準



備するが、その配慮は実に細かい。前日の遊びが引き続き展開されるような環境構成だけでなく、学級全体が向かっていることへの意欲を高めるような環境構成（例えばみんなで育てている野菜の絵を描くコーナーの設定）、次の遊び課題に出合わせるような環境（例えば水遊びが面白くなるようなモノづくりの提案）など、多層的に環境が考えられている。

遊びの援助だけではない。集団生活を心地よく送ることを自分達で考える学級にしたいという思いをきちんと子どもに伝えている。今では自分のとるべき行動が分かって動くようになり、例えば、集合時に遅れて保育室に戻ってくる子どもの口から「お待たせ」ということが自然に出るようになった。このまま集団の中で個が生かされる喜びを味わう園生活を送れば、この号が発刊される頃には充実した遊びが展開しているに違いない。

幼稚園教育の意味が問われている今だからこそ、遊びは重要な学習であり、遊びの充実が保育の根本であるという点をゆるぎないものになりたい。それが一人の優れた保育者によつて支えられるというのでは、幼児教育全体の質の底上げにはならない。的確な幼児理解の視点とそれに基づく多層的な環境の構成の在り方をどう実践と結びつけて説明できるか。当面の自分の課題である。

（立教女学院短期大学、同附属幼児教育研究所天使園）